

## 日吉台地下壕保存の会

## 会報

## 第37号

発行 日吉台地下壕保存の会

編集 事務局

223 横浜市港北区下田町3-15-27

寺田方 TEL. 045-562-1282

(年会費) 一口千円で、一口以上

郵便振込口座番号00250-2-74921

(加入者名)日吉台地下壕保存の会

陳情署名に対する回答書が横浜市に見えた比較がしから  
 如何なりました。前回の回答書が横浜市に見えた比較がしから  
 なも進歩したようにも見えた比較がしから  
 のでしょか。お問い合わせください。

市広聴第4127号

平成8年3月21日

連合艦隊司令部 日吉台地下壕の保存をすすめる会

会長 賢島重俊様

横浜市長 高秀秀信



日吉台地下壕の保存について(回答)

さきに陳情のありましたことについて、次のとおりお答えします。

近代の遺跡の遺存状況は、現段階では、国・地方自治体とも十分には把握できていません。このため、近代の遺跡の遺存状況については、今後、全国的な調査を実施する必要があります。

本市においても、近代の遺跡の基本的な分布調査については、時間をかけて検討していく課題であると考えています。

したがって、日吉台地下壕の整理・公開は、今後の課題とさせていただきます。

この旨ご了承いただき、貴会の皆様によろしくお伝えください。

## 目次

## ページ

731 部隊国際シンポジウム ～於ハルビン市～に参加して	2
時がたち、今は・・・	4
時世代の人にこそ是非見てほしい	5
連載日吉台地下壕 当時の関係者の思い出話14	6～7
運営委員会報告・幹事会報告	8

日吉台地下壕問題調査団

日吉台地下壕保存の会 様

市広聴第4106号

平成5年7月6日

横浜市長 高秀秀信



日吉台地下壕の史跡としての保存等について(回答)

さきに要請のありましたことについて、大変遅くなりましたが、次のとおりお答えします。

日吉台地下壕は太平洋戦争時の遺構であり、その時代が新しく、現在のところ文化庁は、このような新しい時代の遺構を史跡として認めていません。

したがって、本市としても、要望されている「史跡として永く保存し、多くの人々が見学できるように整備する」ことは、困難と考えています。

この旨ご了承いただき、貴会の皆様によろしくお伝えください。

731

部隊国際シンポジウム  
於ハルビン市に参加して

会員 蒜藤一晴

日本にとつて敗戦五〇年目、中国にとつては抗日戦争・反ファシズム戦争勝利五〇周年の一九九五年、私は七月三一日から八月二日まで、中国ハルビン市で開かれた七三一部隊国際シンポジウムに参加、報告するという機会にめぐまれた。

このシンポジウムは、中国各地に存在した旧日本軍の細菌戦部隊・毒ガス戦部隊をなく目共同のシンポジウムとしては、戦後初めて開催された記念的なもので、研究者や証言者・ルボライター・マスコミ関係者など、日本側・中國側ともに約一〇〇人ずつ、計約二〇〇人の出席した本格

的なシンポジウムであった。

私は事前に日本の若者二四八人に行なつたアンケート結果を分析・検証したものをシンポジウム分科会において報告した。私の報告は「日本の若者の戦争責任観から日本の戦争責任を考える」と題したもので、若者を対象にしづり、若い世代の日本の戦争犯罪・戦後責任に対する認識の甘さを実証・指摘した。また同時に私達に責任転嫁してきた親の世代や祖父母の世代の現状と彼らの責任を追及した。

シンポジウム閉会後、日本の戦争責任・戦後責任追及に対する若者の役割を考えながらハルビンを後にした私は、北京抗日戦争記念館において貴重な体験することになった。それは、館内の展示物を見学していた私が、地元の大學生に声をかけられたことだ。

若者たちのアンケートへの返答には、今日、日本人の各世代が抱える過去の戦争犯罪への後進的部分を的確に実証

する結果や、学校教育の問題をかいまみることができた。

具体的に例をあげるならば、

若者の約八割が日本のアジア

諸国への加害について教科書レベルの歴史認識しか持たないことがある。教科書に充分な記述が成されていない現状から判断すると、若者を取り巻く情報不足と、若者のアンテナが不十分であると言わざるをえない。

シノポジウム閉会後、私は語った。最後に彼らは私と握手を交わしながら、「日本に帰ったら中国で見た日本の戦争犯罪を友人に伝えて下さい。それが日本の若者のひとりであるあなたの役割ではないでしょうか」と付け加え

た。その目は日本人を非難するような目ではなく、やさしいまなざしでありながらも、日本人には見ることのできる結果を思い起こし、日本人が戦争における加害行為に対して認識の低いことを告げた。これを聞いた彼らは、それまでのまなざしから、日本人を憂える視線へと変つていった。そして「中国の若者たちは過去の日本の戦争犯罪を重要な問題としてとらえている」と

私に語った。最後に彼らは私と握手を交わしながら、「日本に帰ったら中国で見た日本の戦争犯罪を友人に伝えて下さい。それが日本の若者のひとりであるあなたの役割ではないでしょうか」と付け加えた。その目は日本人を非難するような目ではなく、やさしいまなざしでありながらも、



大会でのあいさつを前に胸に手を当てる  
普天間高校3年生の仲村清子さん=21日  
午後、沖縄県宜野湾市の海浜公園で

きない真実を見分けることのできる鋭い視線であったようと思えた。

私はこのほんの五分ほどの時間を通して、あらためて日本人として過去の戦争をどのようにとらえ、語り継ぐのか、という課題を再認識させられるとともに、若者の連帯から生れるパワーによって真相を解明していく時期に来ていることと、その必要性を感じずにはいられなかつた。

私は帰国後も彼らのまなざしを忘ることができないなかつた。そして中国での体験が、私自身に具体的な行動として何をしなければならないのかを問いかげた。

そのようななか、沖縄で米兵の暴行事件が起こり、基地の撤退と日米地位協定の破棄を求める抗議行動が高まりを見せた。そして一〇月二一日、沖縄・宜野湾市で開かれた八万五〇〇〇人の集会で、高校生の仲村清子さんが「軍隊のない、悲劇のない、平和の島

を返してください」と訴え、全国に感動を呼んだ。私は若者のパワーが社会に十分に影響を与えることを彼女が証明してくれたことに感動と興奮を覚えた。この時の仲村さんのまなざしは、北京抗日戦争記念館で彼らが最後に私に見せたそれと同じように見てとれた。

私が中国で感じたこと、学んだことは、若者の可能性であつたようだ。そして、若者たちの連帯が社会に大きな影響を与える可能性を秘めていることを認識しつつ、歴史の真実を掘り起こし、世代を超えて語り継ぐ具体的な行動は何なのか、という自分自身の問い合わせに答えを出すヒントが得られたようだ。

(法政大学学生)

写真は朝日新聞  
一九九五・一〇・一二より

## 定期総会のお知らせ

1996年度代8回定期総会を下記の通り行います。会員の皆様、お誘い合わせの上、多数の方々のご参加をお願い申し上げます。

日吉台地下壕保存の会

## 1996年度第8回定期総会

日時：4月20日（土）

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス藤山記念館大会議室

◎ビデオ上映（1時～2時30分）：沖縄戦

◎総会（2時40分～3時40分）

「オレが生きて帰ってきたから、お前が生まれたのだ！」子供の頃の私をしかる最後の言葉がいつもコレだった。

なぜこの言葉を何度も言うのか理解できなかつた私も、ようやく父の心痛がわかる年代になりました。地下壕への参加によつて「本」とは違う生きの戦争とはなにかが見えるようになります。

父と話していく、太平洋戦争の話になると「なぜそんなことを聞くのだ？」「どうしてだ！」と、そこで語らひは終りです。どんな質問にも答えてくれる父なのに・・・。そんな父も、年に二回しか訪問しない私の話にも乗つてくるようになりました。ボツリ、ボツリとそれでも「誰かに迷惑がかかるから・・・」と言つながら。

八〇才の父は昨年一人でペナン、シンガポールへ行つてきました。たしか終戦はラバウルと聞いていたのでたずねると、父の下士官だつた方が地雷にふれて亡くなつた元飛行場へタクシーで行つたのだからです。けれど、すつかりようすがついてわからなかつたと言います。

終戦後、太平洋の大平原から日本に帰りついだ戦艦は、一〇隻に満たない中に、私の二人の方はいつもじくなつてしまわれる。その三度に一度の運に父は勝つて帰還。

「あの時は本当にこわかつた。上空で翼がブルブル動いているのだから・・・」と今も思ひ出して語ります。

今年のお正月、主人の甥の二人の方はいつもじくなつてしまわれる。その三度に一度の運に父は勝つて帰還。

父はいました。その船の中で何度も地獄を見たそうです。仲間の乗つた船が魚雷で沈み助けられた船が又やられるさまざまを・・・

空爆で丘隊の方が二四人死んだのを、敵機にみつからなりように焼いたのもこの場所だつたそうです。

横須賀航空隊にいた時は、設計して出来上つたばかりの飛行機が、テスト飛行で三度に一度は落ちたそうで、機乗の前に座り手を合せておりま

### 時がたち、今は

幹事

壹岐

尚子

上げたら、目を輝かせて聞いていました。となりの祖父の「ちゃんと勉強しているのか？」という言葉をふりきつて。

ペナン

カピタン・クリン・イスラム教寺院。1800年ごろ建てられたマレーシアを代表するアラビア風建築で、同国のイスラム教の中心となっている



日本十日刊会報21トド

第35号

東京地連教職員院生ニュース

(7)

シリーズ一戦後50年を考える④

## 次世代の人にこそ是非見てほしい

—日吉台地下壕見学会—

12月2日(土) 慶應義塾高校の寺田先生の案内で平和・文け委員会主催「日吉台地下壕見学会」が行われ、約4時間にわたり、参加者は貴重な体験をしました。

冬の寒さもそろそろ本格的になってきたさる12月2日。日吉台地下壕見学会に参加した。この地下壕は慶應義塾のキャンパスの地下に総延長5キロに渡って建設された地下壕で、1944年から45年にかけて連合艦隊司令部がここにあったのであるが、一般にはあまり知られていない。今回の見学会では、この地下壕の保存運動をなさっている慶應義塾高校の寺田貞治先生が地下壕内部の引率およびその背景の解説をしてくださった。

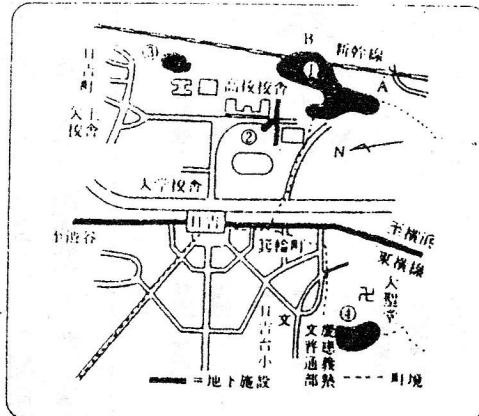


コンクリートが地下水で溶け鍾乳洞のようになる

寺田先生に引率されて地下壕の内部に入ると、そこには狭くそして長い通路が延々と続いていた。内部は以外にも暖かく、外壁のコンクリートは50年たった今でも古さを感じさせない。この地下壕建設に際しては700人以上の朝鮮人が危険な労働を強制され、少なからぬ死傷者を出した。そしてこの地下壕内部でレイテ決戦や沖縄作戦の立案をしていた上層部の人々は、地下壕周辺の地上が空襲されたことによって気付かなかつたという。死闘を命ずる指令は、胎内のように安全な場所から発せられていたのだ。その意味でこの地下壕は醜悪な建築物であるのだが、地下壕のごく一部は自然の力により鍾乳洞のような状態になっており、本当に綺麗であった。

(陳腐な表現かもしれないが) 自然の癒しの力というものを初めて目の当たりにした。

私たち戦後世代は戦争を体験していないが、祖父母などから直接に戦争体験を聞くことはできた。しかし、あと数十年もすればそれも不可能となる。その時、次世代の人々が戦争と聞いて思い浮かべるのは、戦争ゲームだけになってしまうかもしれない。(皮肉にも地下壕のすぐ近くに「提督の艦隊」など一連の戦争ゲームをヒットさせた某ソフトメーカーの立派なビルがある。)だからこそ、この日吉台地下壕のような戦争の遺物の存在は、これから益々重要となってくる。様々な事情により一般公開は難しそうではあるが、この貴重な遺物を次世代の人にこそ是非見てもらいたいと思う。



日吉台下に眠る地下壕 今回は①Aを見学

最後に、地下壕の解説を熱心にわかりやすくしてくださった寺田貞治先生、見学会を企画された東京地連教職員院生委員会・平和文け委員会に、貴重な体験をさせて頂いたお礼を申し上げます。 大手 純 (東京大学院生)

連載

日吉台地下壕

当時の関係者の  
思い出話 14

五〇号駆潜艇に乗組みを命ぜ

日吉の日々 6

元連合艦隊司令部電氣長の

菅谷氏に伺います。

菅谷 源作氏の話

(ききて：寺田貞治)

昭和一六年九月一日に横須

賀海兵团に入団、昭和一七年

五月二〇日に「山城」の乗組

みを命じられ、機関兵として

従事した。「鬼の山城、地獄

の金剛」と言われるほど厳し

かつた。アリューシャンのダ

ッチハーバーの艦砲射撃に行

ったあと、ミッドウェーの海

戦に参加したが、階級が低か

つたので、どこへ行って、ど

たことを知った。戦争に参加している時は、上首に叩かれなかつたので楽しかつた。

昭和一九年五月一六日に第

五〇号駆潜艇に乗組みを命ぜられた。二〇隻の商船を護衛してトラック・サイパン・ガムなどの南洋諸島に五回行程つた。商船一隻に物資と何百人の兵隊を乗せていた。途中、敵の魚雷でやられ、目的地に着いた商船は一割にも満たなかつた。駆潜艇に助け上げても、生きられない人はそのままにした。手を合せて助けて欲しいと哀願する人もいた。

帰りに駆潜艇も父島沖でやられ、私は爆弾で吹きとばされ、気がつくと指がなくなつていて。泳いで父島にたどりついた。敵の威嚇射撃で父島にたどりついた人は半分位で

あつた。父島から「文丸」に

便乗して横須賀に戻つたが、やられた時のことが原因で急性腹膜炎になり、横須賀海軍病院に入院した。

科からは一人も来なかつた。宿舎は慶大寄宿舎へ行く別れ道附近（現教職員テニスコート）の二階建木造の建物だ

昭和一九年九月一九日に連合艦隊司令付になり、司令部日吉移転の下準備のための先遣隊として日吉に来た。同隊は機関科の二七名で、水・電気など日常生活に必要なものを確保するのが目的である。

愛知県から北海道までの出身者が多かつた。当時司令部が置かれていた「大淀」の機関の空襲で焼け、丘の下の足立さんの屋敷内にできたカマボコ兵舎に移転した。地下壕の出入口の前に斜面に並行に二棟あり、地下壕を掘つた土砂で埋り半地下になつていた。

私は司令部の電氣長で、電気関係をすべて受持つており、地下壕全体の様子が最もよく

### 連合艦隊司令部の 連遣隊 (機関科)

	(上)	(中)	(下)
(補助機)	菅原 (電氣)	鈴木 (電氣)	
(自動車)	増瀬 (ボイラー)	(鳥當番) 兵	
奥田 (自動車)	藤井 (班長)	兵	
種原 (戰死)	(ボイラー長)	(鳥當番) 兵	
(電氣)	（分隊長）	兵	
(ボイラー)	(自動車長)	兵	
（電氣）	(補助機長)	(電氣) 兵	
(ボイラー)	(木工長)	兵	
	(自動車)		

わかる立場にあつた。

電気工事は、芝浦電気・古河電工などから来ていた。電気のことは慶応職員の石毛氏から引継いだ。石毛宅は日吉駅東口から南に少し下がった線路沿にあつた。

地下壕の電気は寄宿舎のボイラーハウス配電板から引いていた。壕の中には二五〇kwの発電機が一基備え付けられ、発電機を回すジーゼル発動機と、その補助機械が備えられていた。いざと言う時のために、絶えず発動機を動かし発電していた。

日吉の丘の上からは、川崎のガスタンクがよく見えた。寄宿舎は床暖房をしており、風呂は豪華なローマ風呂であった。水を入れるタンクがあり、慶応も司令部も、近くにあった池からタンクに水を汲み上げ使用していた。司令部用の自動車五台があつた。寄宿舎の崖近くの日吉駅が見える所に、にわとり小屋があり、百羽位飼っていた。一日中、と一緒に食べた。朝食は麦半

分の盛飯で、野菜と沢庵、昼食は同じく盛飯で、魚と肉、夕食はカレーが多かつた。土曜の昼食にはパンが出た。空襲で焼けるまでは丘の上の木造兵舎で食べたが、その後はカマボコ兵舎で食べた。当直の時、寄宿舎のボイラーハウス配電板の前で、やかんで御飯を焚いて食べたことがある。鍋はテンプラをあげるのにつかつた。

日吉の丘の上からは、川崎のガスタンクがよく見えた。寄宿舎は床暖房をしており、風呂は豪華なローマ風呂であった。水を入れるタンクがあり、慶応も司令部も、近くにあった池からタンクに水を汲み上げ使用していた。司令部用の自動車五台があつた。寄宿舎の崖近くの日吉駅が見える所に、にわとり小屋があり、百羽位飼っていた。一日中、一緒に食べた。朝食は麦半

長官はにわとりに番号をつけ、

「今日はどのにわとりが卵を生んだ」と観察していた。幕僚はよく会議をしていたが、長官は会議に余り参加していないかったように思う。いつも自分の部屋にいたり、にわとりを見ていた。映画も見ていた。映画は私が五反田の方から借りてきて、週二回上映していた。中寮の部屋で二、三人で見ていた。長官はエノケン・ロッパの「三尺三五兵」というの面白がって、三回もくり返し見ていた。時々、高校校舎に入った兵隊や慶応の学生にも見せていた。敵から分捕つた映画が司令部にあつたが、米軍が潜水艦に日本の捕虜を数珠繋ぎにして泳がせ、機銃を撃つている場面を写したフィルムがあつた。

日吉に来た時はまだ寄宿舎の通信隊が地下壕を使つたのを見て、長官の部屋は入口箇所あり、長官の部屋は入口にドアがついていた。司令部の通信隊が地下壕を使つたのは、空襲の始まる少し前であった。壕の中は地下水がたまつた。壕の中は地下水がたまつた。壕の中は地下水がたまつた。壕の中は地下水がたまつた。ベッドもあり温氣が多かつた。ベッドもあつたが使用しなかつた。

#### ★ A1 氏・宮前

連合艦隊がいつ来たか分らないが、朝早くから「甲板掃除」という声を聞いたことを子供心に覚えている。家には

豊田長官がよく来ていた。伊東三郎氏（第三〇一〇設営隊長）は家族同様に付き合つていた。伊東氏は戦後しばらく住まつていた。

（生協ニュース教職員版第四六、五三号より抜粋転載）

部第三部の間の連絡トンネル（素掘り）は昭和二〇年四月四日の空襲の後つながつたが、

余り利用されず普段は通行止めにしてあった。地下壕の中には、使つていない所が二、三箇所あり、長官の部屋は入口

にドアがついていた。司令部の通信隊が地下壕を使つたのは、空襲の始まる少し前であつた。壕の中は地下水がたまつた。壕の中は地下水がたまつた。壕の中は地下水がたまつた。壕の中は地下水がたまつた。ベッドもあり温氣が多かつた。ベッドも

連合占禾女口△△報生口  
第四回  
一九九六年一月二二日  
日吉本町「秀」  
報告  
一、一月一八日明治学院大学での「大学生協東京地連平和フェスティバル」で日吉台地下壕の写真を展示  
二、同二六日日吉駅前で第二回目の街頭署名実施  
三、同日保存の会主催の見学会約二〇名参加  
四、同三〇日港北区民会議北地域懇談会主催の見学会。区職員三名、一般一〇数名参加  
五、一二月一日市教育委員会文化財課長と会談  
六、同二日大学生協東京地連教職員・院生委員会主催の見学会一〇数名参加  
七、同七日下田小PTA主催の見学会二〇数名参加  
八、同一日横浜市の広聴課

に七八一〇名分の署名簿を提出。その後記者会見。鮫島・寺田・喜田・堀岐が出席  
九、同一六日県議会文教委員長と会談  
一〇、同一八日「神奈川を考える研究者・文化関係者の会」で日吉台地下壕と登戸研究所跡の保存の要請書を横浜・川崎両市長と神奈川県知事に提出  
一一、同二二日横浜市に第二回目八四一五名分の署名簿を提出、文化財課長と二回目の会談  
一二、同二二日横浜市に第二回目二九日日吉地区センター報告  
一三、一二月二五日会報三六号発行、三〇日発送  
一四、同二二日運営委員会開

連合占禾女口△△  
第五回  
三月二一日  
日吉地区センター  
催  
議事  
▼署名活動について  
\*四月二〇日頃を予定  
▼「平和のための戦争展」に  
ついて  
\*七月九月頃を予定、近く実行委員会を持つ  
松井重事△△報生口第四回  
二月二九日  
日吉地区センター  
報告  
一、三月三日日吉台中学地歴探訪会の生徒と先生による見学会二一名参加  
二、同七日「横浜・川崎平和のための戦争展」第一回実行委員会開催  
三、同九日県立白山高校の教師と生徒による見学会一三名参加  
四、同二〇日下田町自治会文化部主催の地下壕見学会三三名参加  
五、同二二日運営委員会開催  
議事  
▼総会について  
\*文化財保護法に詳しい方に講演を依頼する  
\*沖縄戦のビデオを上映する